

お釈迦さまの十人の優れた弟子の一人で、説法第一（せっぽうだいいち）つまり、お釈迦さまの教えを誰よりも上手にお話しされたといわれる富楼那尊ふるなそんじゃ者は、お釈迦さまと同じ生年月日ともいわれます。

また、富楼那ふるなの父は、お釈迦さまの父親である浄飯王じょうほんおうの教育係を勤めたバラモンともいわれ、母は、お釈迦さまの最初の弟子である五比丘ごびくの一人、僑陳如きょうちんによの妹であるともいわれています。

説法第一といわれる富楼那尊者の説法とはどのようなものだったのでしょうか。

それは、お釈迦さまの弟子で智慧第一ちえといわれた舍利弗しゃりほつとの有名なエピソードからうかがい知ることができます。

ある日、舍利弗しゃりほつが、坐禅ざぜんの修行をしている富楼那のもとへ参ります。

舍利弗は自分の名前を名乗らずに挨拶かを交わすと、富楼那に質問をします。

「あなたは、お釈迦さまの教えによって、清らかな修行につとめられたのですか？」

「そうです。」

「それは、戒いましめを守るために、修行につとめられたのですか？」

「いいえ、そうではありません。」

「では、心を安らかにするために、修行につとめられたのですか？」

「いいえ、そうではありません。」

さらにいくつか質問をしても富楼那からは「いいえ、そうではありません。」という答えしか返って来ません。そこで舍利弗は、

「では、何のために修行につとめられたのですか？」

と、問いかけました。すると富楼那は、

「それら一つ一つが大切な修行であり、それぞれは別々の存在ではなく、完全な智慧ちえを得るということに欠くことのできないものなのです。」

と答え、次のような喩たとえ話をしました。

「王さまが、遠い城までの長い道のりを、一日で行かねばならなかった時に、あらかじめ七台の馬車を使って行こうと、中継地点の六カ所に馬車を用意させ、第一の地点で馬車を乗り換え、第二・第三・・・と次々に馬車を乗り継いで行ったので一日で到着することができた。

七台の馬車のうち、どの馬車が一番かというわけではなく、一台でも欠ければ一日で着く事ができなかつた。どの馬車も必要であったように、完全な安らぎの境地

を得るということに、どの修行も因<sup>いん</sup>と縁<sup>えん</sup>として互いにつながり合っているのです。」  
と、お釈迦さまが示した、修行の内容を説きました。

話の終わりに、初めて舍利弗の名前を聞いた富楼那は、  
「あなたが舍利弗<sup>しゃりほつ</sup>さんだと知っていたら、このような話はしなかったでしょう。」  
と言われたそうです。

このことから、富楼那<sup>ふるな</sup>尊者はお釈迦さまの教えを深く理解し、その人その時に合ったお話しをされていたことがうかがえます。

話上手は聞き上手といいますが、その人の話をよく聞かないと、その人に合わせた話は出来ません。私たちも人の話に良く耳を傾け、その人に合わせた話を心がけたいものです。

— 終 —